2．弥生時代の集落内における貯蔵穴の役割 ―東伯耆を中心として―

今回調査を行った米里三ノ嵜遺跡で断面が袋状を呈する土坑が検出されたが、このような例は山陰東部においては倉吉平野や米子平野を中心に、中国山地を挟んで岡山県側にもみられる。弥生時代前期では、同様な形状を有する土坑は袋状竪穴と呼称され、北部九州では弥生時代前期から中期初頭にかけて分布[1]する。これらの袋状竪穴と断面袋状を呈する土坑の系譜がつながるかは明らかではないが、調査地の位置する倉吉平野を中心に、集落における袋状土坑（貯蔵穴）の役割について考えてみたい。

貯蔵穴の定義

弥生時代の貯蔵施設に関する研究は袋状竪穴について乙益重隆氏[2]が、住居など周辺施設との関係において石野博信氏[3]や宮本長二郎氏[4]らにより研究がなされてきた。宮本氏は鳥取県の弥生時代の貯蔵穴について中央ピットなども含め統計処理を行い、検討を加えている。石野氏は、弥生時代中期中葉以降の貯蔵施設について中国山地を例にあげ、中期中葉の岡山県野田と後葉の津山市沼など、屋外土坑、屋内小土坑、高床倉庫を併せ持つ集落が完掘されているとしている。

石野氏のいう屋外土坑について、現在までの呼称は、袋状竪穴、袋状土坑(壙)、袋状ピットで、貯蔵を前提としては、袋状貯蔵穴、食料貯蔵穴、屋外貯蔵穴、あるいは単に貯蔵穴と呼ばれている。また屋内小土坑は、屋外（住居内）貯蔵穴、あるいは単にピット、土坑（壙）と呼称されている。本稿では貯蔵に関するとみられる袋状の土坑を中心に、弥生時代中期中葉から古墳時代前期前葉までの、住居外に設けられたものを貯蔵穴、住居内にみられる断面袋状の土坑を住居内（屋内）貯蔵穴として論をすすめたい。

まず貯蔵穴であるが、貯蔵穴の平面は円形、楕円形、方形、断面は袋（フラスコ）状、垂直に近いもの、横穴状を呈するもの[5]や、底面中央にピット状の掘り込みをもつもの[6]、底面の周囲に溝をもつもの[7]、平面長方形で両短辺にピットをもつもの[8]、その他[9]がある。これらを貯蔵穴とみなす根拠としては、①袋状土坑から炭化米や粟が出土している例がある。②底面の周縁に溝をもち、防湿を意識したとみられるものがある。③底面や壁面に貼床（壁）を施したもの[10]がある。④廃棄用の土坑に転用され、土器の出土状況も廃棄[11]あるいは流れ込みが多数で、放棄されるまでは空間を利用していた[12]と考えられる。⑤同時期の墓は集団埋葬による墓域あるいは墳丘墓があり、住居内あるいは住居内または隣接した墓が確認されていないことなどがあげられる。ただしこれとは逆に断面形が袋状を呈しない土坑（壙）の全てが貯蔵以外の目的に使用されたとは断言できない。そのため、断面形のみで貯蔵穴とするのでなく、住居あるいは集落の中での総合的な判断が必要になる。

住居内（屋内）貯蔵穴[13]は平面形は方形または長方形で、竪穴住居の壁面に接するものは少なく、やや中央寄りか柱穴の間などに位置することが多い。他に竪穴住居の壁面を袋状に掘り込んだもの[14]もある。

貯蔵物および貯蔵容器

丸山遺跡の袋状土壙15では底面の端から土器が出土している。この土壙は底面中央にピット状の掘り込みがあり、周囲に溝をもつ。土器は貯蔵されたままか片づけられたものかは不明だが、いずれも貯蔵用の器と考えられる。内訳は台付無頸壺１、頸部以上が欠損した長頸壺１、脚付長頸壺１である。時期は弥生時代中期後半である。

猫山遺跡[15]には火災を受け放棄されたとみられる貯蔵穴がある。３号貯蔵穴は土器とともに貯蔵物が炭化した状態で出土した。土器はいずれも原位置を保持するとみられ、床面付近から横たわった状態で出土した。内訳は甕（大中小）計４、壺１、鉢１、器台１、高坏１で炭化米（穂付き）が出土した。10号貯蔵穴も焼失した貯蔵穴で炭化した粟が出土した。下に「ソウキ」があり、これは縁が木、中は竹状の繊維で格子状に編んでいる。台付鉢が２点出土した。時期はいずれも弥生時代後期末と考えられる。

このように貯蔵用の土器に、本来の貯蔵用器である壺以外、煮炊具である甕や鉢、その他の土器が含まれている。弥生時代前期は壺と甕が明確に区別され、壺は貯蔵用、甕は煮炊用と区別されており、特に壺は弥生土器の中でも特別な存在であったと思われる。貯蔵穴出土の土器をみると、中期には壺が主体であったものが、後期にかけて甕や鉢などの壺以外の土器が増加する。これは壺にも煤痕をもつものがあらわれるように、壺と甕の区別

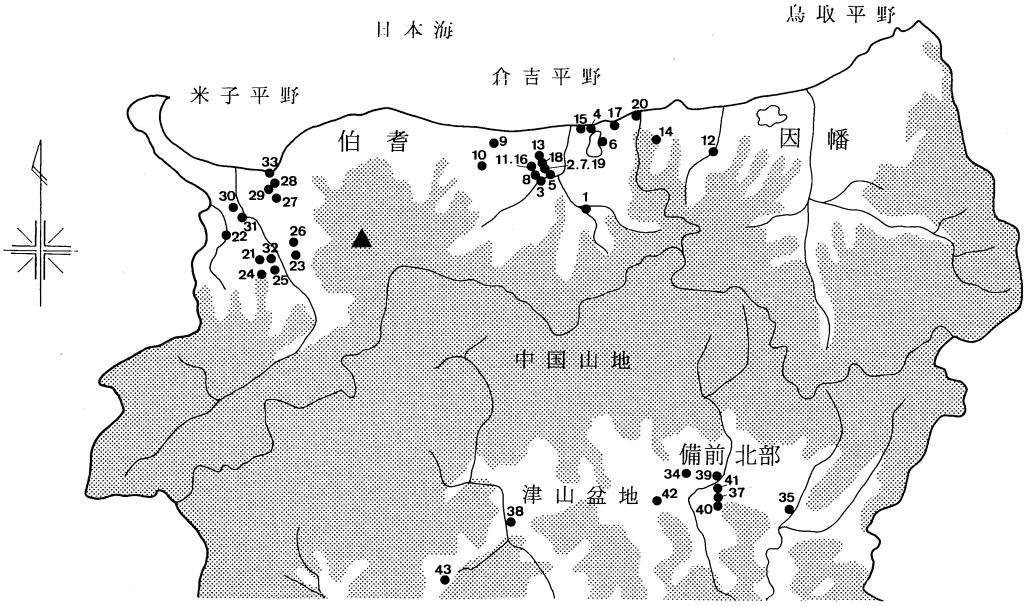

Fig. 1　山陰東部・備前北部の貯蔵穴出土遺跡位置略図

伯耆東部（因幡）

	遺跡名	弥生時代中期		弥生時代後期		古墳時代前期		備　考
1	丸山遺跡	—○	—○	—○	—○	—○	—	底面中央にピット、側溝
2	西前遺跡		—	—	—○	—○	—	長期間の集落
3	中尾遺跡		—	—○				住居内２ヶ所に横穴状の貯蔵穴
4	南谷大山遺跡			—○h	—○h	—○h	—	拠点的な集落
5	夏谷遺跡				—○h			拠点的な集落
6	宮内遺跡				—○			平面方形で側溝、底面にピット６基
7	上神宮ノ前遺跡				—○			平面長方形の貯蔵穴
8	両長谷遺跡				—○			土器出土
9	東高江遺跡				—○	—○		平面長方形貯蔵穴
10	上種第５遺跡				—○	—○	—	平面方形で両短辺にピット
11	大山遺跡				—○h	—○h		平面方形で二段掘り
12	柄杓目遺跡II（因幡）				—○h	—○h		掘立柱建物と切り合う
13	米里三ノ嵜遺跡				—○	—○		住居２棟に８基の貯蔵穴
14	大口遺跡(因幡)				—○	—○		貯蔵穴が群在する
15	南谷ヒジリ遺跡				—○	—		底面から角礫出土
16	コザンコウ遺跡				—○h			住居・掘立柱建物・貯蔵穴×３組
17	宇谷第１遺跡				—○h			住居・掘立柱・貯蔵穴
18	沢べり遺跡２次				—○			大小の貯蔵穴が隣在
19	猫山遺跡				—○	—		米、粟、容器（土器を含む）が遺存する
20	石脇第３遺跡 操り地区				—○			土器出土

伯耆西部

	遺跡名	弥生時代中期		弥生時代後期		古墳時代前期		備　考
21	宮前遺跡	—○						土器出土
22	清水谷遺跡	—○						環濠あり
23	下山南通遺跡	—◎h	—○h		—			大小の貯蔵穴か 廃棄土壙
24	天王原遺跡	—○H	—◎H	— H	— h	— h	— h	拠点的な集落 底面中央にピット、側溝
25	越敷山遺跡	—	—◎h	＝○h	—	＝○h		拠点的な集落
26	林原遺跡		—◎H			—		掘立柱建物を切る
27	尾高城址		—○					底面に側溝
28	百塚遺跡群II		—○					底面にピット４
29	百塚第７遺跡		—○					土器多数出土
30	東宗像遺跡		—○h		—			土器、磨製石斧出土
31	青木遺跡		＝○H	＝○H	—	—	—	拠点的な集落 掘立柱建物が多い
32	田住松尾平遺跡				—○			住居の隅に貯蔵穴
33	百塚第１遺跡				—○			土器出土

備前北部（南部）

	遺跡名	弥生時代中期		弥生時代後期		古墳時代前期		備　考
34	大田十二社遺跡		—○	—○	—○	—○		群在傾向あり
35	高本遺跡		—○					土器出土
36	奥坂遺跡(南部)		— h	—○h	—◎	—○	—	備前の拠点集落
37	且山遺跡（群）		—	—◎	—◎			拠点的な集落
38	西吉田北遺跡		—	—◎	—○			貯蔵穴が急激に増加
39	野村高尾遺跡		—	—○				大小の貯蔵穴
40	小原遺跡			—○				横穴状の貯蔵穴
41	天神原遺跡				—○			住居内土壙あり
42	二宮遺跡				—○	—◎		一括土器多数出土
43	桃山遺跡				—	—○	—	土器出土

Tab. 1　山陰東部・備前北部の貯蔵穴出土遺跡一覧表

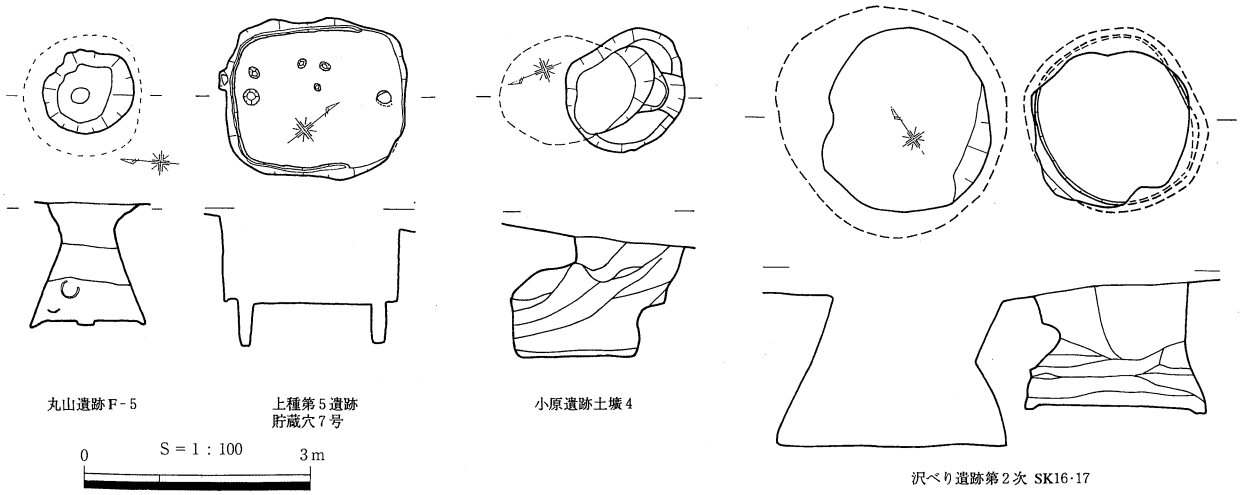

Fig. 2　貯蔵穴平面・断面図（一部改変・再トレース）

が曖昧になり、次第に壺としての役割が形骸化したと解釈したい。

集落の中での貯蔵穴の変遷

倉吉平野での貯蔵穴を有する遺跡の分布についてまとまたのがFig．2である。―・＝・〓は竪穴住居、○・◎は貯蔵穴、ｈ・Ｈは掘立柱建物である。弥生時代中期・後期、古墳時代前期を各２分割[16]した。

東伯耆では、貯蔵穴をもつ弥生時代の遺跡は倉吉平野の中にある低丘陵上に分布している。時期毎にみると弥生時代中期は中国山地との境に丸山遺跡があるが、全体に調査数が少ないため様相は不明瞭である。後期になると海岸近くに位置する南谷大山遺跡のように古墳時代前期まで続く遺跡が増加する。このような遺跡は人手状にのびる低丘陵の尾根にそれぞれの住居群を形成し、それらがまとまることによりさらに規模の大きな住居群を成している。弥生時代後期後半になるとこれらの住居群の周辺に、丘陵単位のまとまりをもたず、住居・掘立柱建物、貯蔵穴などを有する集落が多数形成される。ここでは前者を拠点的な集落、後者を小規模な集落と仮定して、集落の構成について考えてみたい。

ａ．拠点的な集落

南谷大山遺跡は弥生時代中期中葉から古墳時代後期まで続く集落である。Ｂ区を例にすると南谷大山II～III期（弥生時代後期前葉～中葉頃）に住居は丘陵背上に約10～15m間隔で建てられ、貯蔵穴の多くは１～２基単位で散在する。報告では規則性がみられないため共同管理されたとしている。南谷大山IV（弥生時代後期後葉）になると貯蔵穴は住居群よりも高い位置にまとまる傾向がみられる。この時期の遺構の構成は、竪穴住居５棟、住居状の遺構が３棟、貯蔵穴６基である。南谷大山Ｖ期（古墳時代前期前葉頃）になると貯蔵穴は消滅し、掘立柱建物が３棟程みられる。

夏谷遺跡は弥生時代後期にはじまる集落であるが、弥生時代終末期に一時断絶する。遺構の遺存状態は非常によい。Ｃ地区では、夏谷Ｉ期（阿弥大寺III期・弥生時代後期後半）には南側の住居群、北側に貯蔵穴群が集中するようにみえる。貯蔵穴は斜面の上側をカットされたテラス状遺構に付随している。夏谷II期（弥生時代終末期）には貯蔵穴の付近にも住居が建てられる。掘立柱建物の時期は明瞭な出土遺物がない。またそれぞれの時期に住居状遺構があるが、いずれも柱穴がみられないことから恒常的な建造物のあった可能性は低く、作業的な空間が想定できる。

ｂ．小規模な集落

米里三ノ嵜遺跡は、舌状に張り出す丘陵の先端部に位置する集落である。南谷大山III期並行（弥生時代後期中葉）にはＳＩ１－２が建てられ、屋内貯蔵穴を２基もつ。南谷大山IV～Ｖ期並行（後期後葉～古墳時代前期前葉頃）になると屋内貯蔵穴が埋められて貼床が施され、ＳＩ１－１となり、南北西の３方向に貯蔵穴が造られる。北～西側の貯蔵穴群は、ＳＫ３・４・10・12が一列となる。次にＳＩ２が建てられ、南西壁にトンネル状の屋内貯蔵穴を造る。ある程度の規模をもつ住居が同時期に隣接することは少ないと考えられるため、ＳＩ１からＳＩ２移りその際にＳＫ12も埋められたと考えられる。これらの貯蔵穴はＳＩ１－１からＳＩ２まである程度の期間継続して使用されたと考えられる。周辺に住居や掘立柱建物はなく貯蔵穴は８基で、１棟あたり平均４基の貯蔵穴を使用していたことになる。これは、冬期や天候不順などの食料確保の不安定な要素を克服するための最小限の容量であろう。

コザンコウ遺跡[17]では、ほぼ平坦面をなす１つの丘陵に竪穴住居１棟、掘立柱建物１棟、貯蔵穴１基を単位とする３つのまとまりが想定されている。いずれも弥生時代後期に焼失している。掘立柱建物の周囲にはそれぞれ溝状遺構があり、明らかに水はけを意識していることから、貯蔵を目的とする建物であると考えられる。また住居を区切る柵跡もあり、１棟の住居で管理している範囲は１号住居址～２号間が18m、２号～３号間が41m、１号～３号間が40mである。住居間の距離は沖積地でも通常最低20m程度[18]と考えられており、竪穴住居間の距離としては適当で、１棟の生活空間および必要な施設を示すものであろう。上種第５遺跡においても中心となる住居18でも四方向に貯蔵穴が１ないし２基づつ存在し、住居の持つ空間は直径15～18mとなる。

宇谷第１遺跡[19]は、南北に細長い丘陵に位置する３棟で構成される集落である。時期は宇谷Ｉ期（弥生時代後

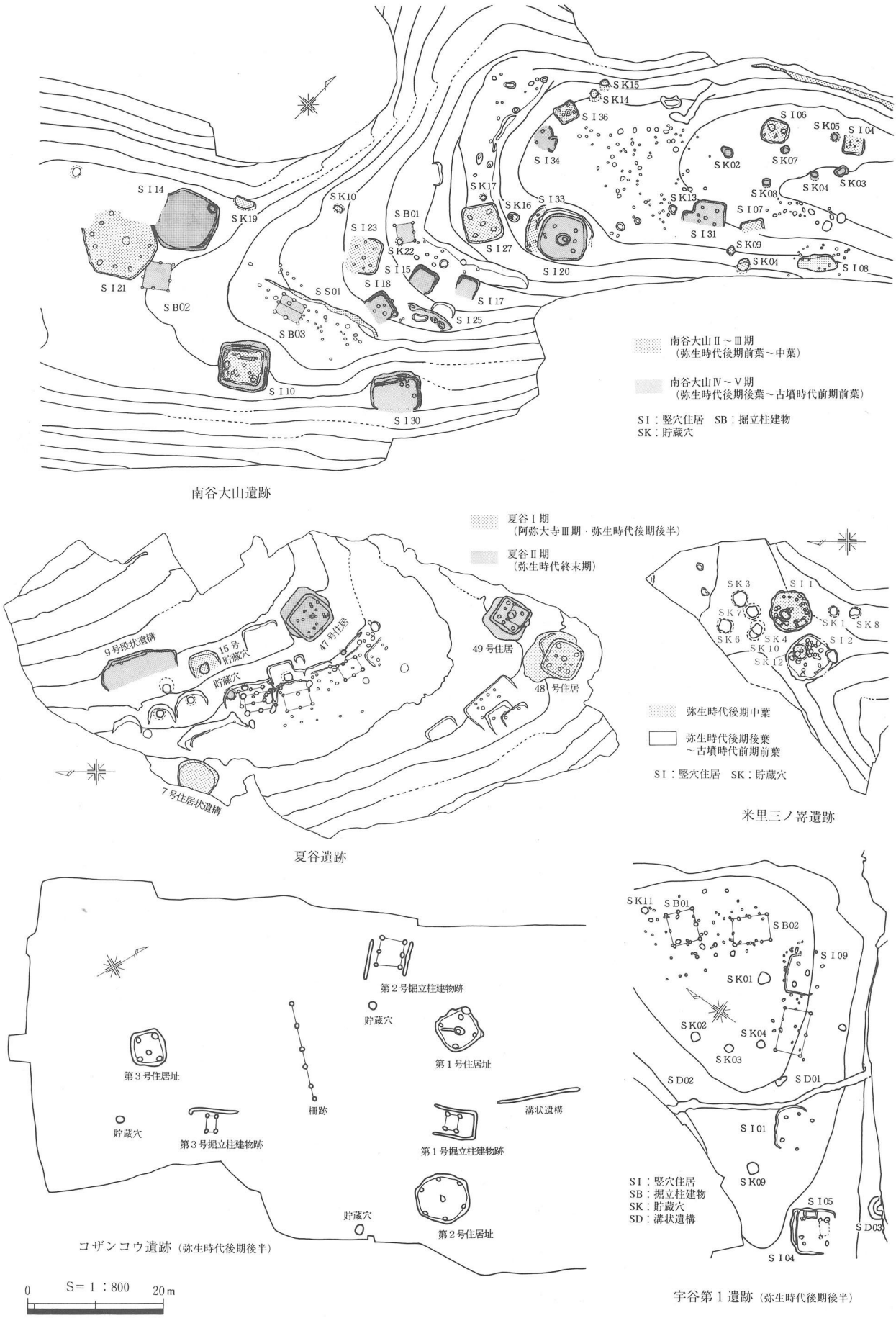

Fig. 3　東伯耆における貯蔵穴出土遺跡（一部改変・再トレース）

期後半）である。3棟の住居は丘陵の頂部をさけ8m・16mの間隔に建てられ、4基の貯蔵穴は住居よりやや高い位置に頂部に沿うように弧状に造られている。また貯蔵穴の反対方向に掘立柱建物が建てられる。頂部に貯蔵穴と掘立柱建物に囲まれるような空間があるが、この部分は広場あるいは作業場的な目的が想定できる。類似する遺跡が夏谷遺跡のD地区で、竪穴住居の南側に等高線に沿うように貯蔵穴3基と北側に1基があり、この間からは遺構は検出されていない。

両者を比較すると、拠点的な集落は、①集落の中に貯蔵穴が集中する場所がある。②貯蔵穴の位置の変化は個々の住居よりも集落全体に関わるとみられる。③住居は継続していても貯蔵穴は古墳時代前期頃に消滅することがわかる。ただし貯蔵穴から掘立柱建物へと貯蔵施設が移行したのかは掘立柱建物の時期が分かる例が少ない[20]ため、今後の検討課題であろう。一方小規模な集落は、①貯蔵穴の位置は作業的な場所と関わる。②掘立柱建物を持たない場合、貯蔵穴は1棟あたり4～5基あり、これが住居1棟の必要な貯蔵容量と考えられる。③貯蔵穴と掘立柱建物は機能的に補完している例がある。以上を想定したい。

東伯耆をとりまく状況

貯蔵穴は山陰東部および備前北部に分布するが、西伯耆、備前北部の様相を概観する。なお因幡については調査例が少ないこともあり、今後の課題とする。

西伯耆では弥生時代中期の集落は、日野川などの主要河川に沿うように位置する低丘陵上に分布する。東伯耆と異なるのは中期中葉の段階ですでに貯蔵穴は比較的多くの遺跡から確認されており、東伯耆に比べ貯蔵穴は導入された時期がはやいように見える。拠点的な集落をみると越敷山遺跡では古墳時代前期まで少数ながら貯蔵穴はみられるが、天王原遺跡では弥生時代中期後半にピークを向えるもののその後は消滅する。青木遺跡のように大規模な集落でありながら、貯蔵穴はわずか14基で、掘立柱建物が中心となる遺跡もある。弥生時代後期以降は貯蔵穴は造られるものの数は少ない。

備前北部では、貯蔵穴を有する遺跡は中国山地沿いの河川の際付近の低丘陵上に分布する。すでに弥生時代中期にもあるが、急激に増加するのは弥生時代後期である。大田十二社遺跡では貯蔵穴は群在し、旦山遺跡（群）では、遺跡により竪穴住居と貯蔵穴が近いものと遠いものに分けられるとしており、これは東伯耆でも同様の傾向である。貯蔵穴が消滅したのは古墳時代前期前葉であるが、直前まで貯蔵穴は頻繁に造られている。

ま と め

東伯耆では、拠点的な集落における貯蔵穴は基本的には広い区域を必要に応じて区画する共同管理の傾向がみられ、貯蔵穴は個々の住居の変遷よりも集落の盛衰に左右される。小規模な集落ではそれぞれの住居による管理で、貯蔵区域と作業区域がコンパクトにまとまめられ、地形に制約された狭い範囲を最大限に活用しようとしている意図が窺える。また貯蔵穴に依存するところの大きかった小規模な集落は、弥生時代後期末から古墳時代前期前葉にかけて相次いで姿を消していく。

このように弥生時代の集落における貯蔵穴は、東伯耆では古墳時代前期前葉を画期として消滅する。貯蔵穴の消滅する要因は今後の課題であるが、貯蔵方法の変化だけでなく集落そのものの変質も視野に入れて考えるべきであろう。

（八峠　興）

註・参考文献

(1) 『下関市綾羅木郷台地遺跡概報』第9報 下関市教育委員会 1976　鳥取県内で前期の貯蔵穴の可能性が指摘されているものは坂ノ上遺跡がある。『坂ノ上遺跡発掘調査報告書』淀江町教育委員会 1987　清水谷遺跡では、弥生時代前期末～中期前半の環濠の内側から断面袋状の土坑が確認されているが、環濠の内側に住居がなく、遺跡の性格ははっきりとしていない。『清水谷遺跡』西伯町教育委員会 1992　福成早里遺跡SK11は貯蔵穴のみの検出であるが、底面に周溝をもち、底面付近から弥生時代前期末～中期初頭の土器が出土している。『福成早里遺跡』財団法人 鳥取県教育文化財団 1998
(2) 乙益重隆「袋状竪穴考」『坂本太郎博士頌寿記念 日本史学論集』上巻 吉川弘文館 1983
(3) 石野博信「弥生時代の貯蔵施設」『関西大学考古学研究年報』1 1967　pp. 37-52
(4) 宮本長二郎『日本原始古代の住居建築』中央公論美術出版 1997
(5) 高本遺跡で、入口に段をもち出入りに関すると考えられている。「高本遺跡」中国縦貫自動車道建設に伴う発掘調査5

岡山県教育委員会 1975　屋内貯蔵穴ではあるが中尾遺跡もある。(Fig. 2)『中尾遺跡』倉吉市教育委員会 1992

(6)　大田十二社遺跡の袋状貯蔵穴13号『大田十二社遺跡』津山市教育委員会 1981や、丸山遺跡『丸山遺跡発掘調査報告書』鳥取県三朝町教育委員会 花園大学考古学研究室編 1974 (Fig. 2) にあり、中央のピットは湿気を除くためとしている。

(7)　防湿のためと考えられる。天王原遺跡では38基の土壙のうち側溝をもつのは4基で、『天王原遺跡発掘調査報告書』会見町教育委員会 1993、西吉田北遺跡では15基中2基『西吉田北遺跡』津山市教育委員会 1997、米里三ノ嵜遺跡では8基中1基、青木遺跡では14基中1基『青木遺跡発掘調査報告書Ⅰ～Ⅲ』鳥取県教育委員会 1976～1978、旦山遺跡では、袋状を呈する土壙約60基の内7基『旦山遺跡 惣台遺跡 野辺張遺跡 先旦山遺跡 旦山古墳群 奥田古墳 水神ケ峪遺跡』岡山県教育委員会 1999　でいずれも1割前後であるが、上種第5遺跡は13基中10基に側溝をもつ。『上種第5遺跡発掘調査報告』鳥取県東伯郡大栄町教育委員会 1985　また柄杓目遺跡ⅡのＥ区ＳＫ28・31は、中央にピットと、ピットから側溝まで溝を有する。『柄杓目遺跡Ⅱ』鳥取県気高郡鹿野町教育委員会 1990

(8)　上種第5遺跡では、掘り方は隅丸長方形で断面はほぼ垂直である。ピットは底面中央に1基あるものと、長方形の短辺中央に沿うように2基あるものとがある。(Fig. 2) 旦山遺跡の土壙113・209は長方形に壁が垂直に立ち上がり、四隅にピットをもつ。ピットの使用方法は、水抜き以外にも出入りに伴う丸木状の梯子跡や、複数のものは覆屋の可能性もあろう。

(9)　その他貯蔵穴自体の形状ではないが、段状(テラス状)遺構に貯蔵穴をもつものがある。野村高尾遺跡は、段状遺構の内側に大小の貯蔵穴が並ぶ。『野村高尾遺跡』津山市教育委員会 1995　夏谷遺跡のＣ地区14～16号貯蔵穴でも、テラス状にカットされた平坦面に貯蔵穴がつくられる。『夏谷遺跡発掘調査報告書』倉吉市教育委員会 1996　不入岡遺跡のＳＫ16・17は大小の貯蔵穴が並び小の貯蔵穴の底面に側溝をもつ。貯蔵物が異なる可能性がある。(Fig. 2)『不入岡遺跡』倉吉市教育委員会 1996

(10)　丸山遺跡がある。貼床はＦ－18・19・27・31、貼壁はＦ－32他。

(11)　袋状土坑から廃棄されたとみられる土器は多数の遺構でみられる。南谷大山遺跡Ｂ区ＳＫ04から廃棄されたとみられるヤマトシジミが出土している。『南谷大山遺跡 南谷ヒジリ遺跡 南谷22・24～28号墳』財団法人 鳥取県教育文化財団 建設省倉吉工事事務所 1993

(12)　土坑内に空間をもつものが、丸山遺跡Ｆ－３で、屋内貯蔵穴では中尾遺跡で確認されている。『中尾遺跡発掘調査報告書』倉吉市教育委員会 1992

(13)　丸山遺跡31号住居、天神原遺跡２・24号住居、天神原遺跡24号住居はいずれも１基である。「天神原遺跡」『中国縦貫自動車道建設に伴う発掘調査』4　岡山県教育委員会 1975　複数あるのは上種第６遺跡竪穴住居９号の２基、『上種第６遺跡発掘調査報告』鳥取県東伯郡大栄町教育委員会 1985、大田十二社遺跡の９号住居は５基、天神原遺跡５号住居では６基ある。二宮遺跡82号住居は、立て替えがあり20基程度の土坑を有する。『二宮遺跡』岡山県埋蔵文化財発掘調査報告 岡山県教育委員会 1978　米里三ノ嵜遺跡のＳＩ１内ＳＫ２・３は住居の改築に伴い埋められ、上面に貼床をなす。同様に天神原遺跡５号住居では、６基の貯蔵穴を埋め、上に貼床をなして生活空間を拡張している。

(14)　米里三ノ嵜遺跡のＳＩ２、南谷大山遺跡のＡ区ＳＩ04、田住松尾平遺跡のＳＩ－３がある。『田住松尾平遺跡発掘調査報告書』会見町教育委員会 1995　中尾遺跡では竪穴住居の西・南壁に２基の地下式横穴状の貯蔵穴をもつ特異な例である。１号住居の貯蔵穴は住居の壁面を斜め下方に掘り、報告では出入り口付近に木枠とその蓋の存在が想定されている。またこのような貯蔵穴をどのように掘削したかであるが、内部に掘削痕をもつものがある。南谷大山遺跡のＢ区ＳＫ02では、幅約３～７cmの工具痕が上から下に向かっている。中尾遺跡では１号住居内西側貯蔵穴の天井部に、幅約1.4cmの断面半円状の工具痕が報告されている。

(15)　『猫山遺跡―第３次発掘調査概報―』倉吉市教育委員会 1975 pp. 15-18

(16)　年代観は、弥生時代中期後半は東西伯耆とも青木０～１、後期前半は南谷大山遺跡Ⅱ～Ⅲ、青木遺跡２～３、大田十二社１、後期後半～古墳時代にかけて南谷大山遺跡Ⅲ～Ⅳ、青木遺跡３～４、大田十二社２～３、古墳時代前期前半は南谷大山Ⅴ～Ⅵ、青木５・６、大田十二社４～５である。また上記の編年以外に『弥生土器の様式と編年』山陽・山陰編　木耳社　1992　を参考にした。

　記号は、－・○・ｈは１～９程度、＝・◎・Ｈは10～20程度、〓は21以上を示す。掘立柱建物については、柱穴から出土した遺物は非常に少なく時期決定が困難であるため、原則として調査報告書の記載に準じた。したがって時期不明の建物跡やピット群は全て除外しており、確実に掘立柱建物がなかったとはいえない。

(17)　『コザンコウ遺跡・道祖神峰遺跡発掘調査報告書』倉吉市教育委員会 1986、『新編 倉吉市史』第一巻 古代編 新編倉吉市史編集委員会 1987　pp. 98

(18)　藤田憲司「単位集団の居住領域」『考古学研究122』1984　pp. 58-78

(19)　『宇谷第１遺跡 南谷大ナル遺跡』財団法人 鳥取県教育文化財団 建設省 倉吉工事事務所 1992

(20)　柄杓目遺跡Ⅱでは、貯蔵穴と掘立柱建物と重なり合う例があるが、概ね貯蔵穴よりも掘立柱建物は新しい。林ケ原遺跡では、掘立柱建物が貯蔵穴に切られることから一概に貯蔵穴→高床建物とはならないとしている。『久古第３遺跡・貝田原遺跡・林ケ原遺跡発掘調査報告書』財団法人 鳥取県教育文化財団 1984